

大仙院方丈室中の山水図襖について―画面構成に注目して―

萬年 香奈子（滋賀県立琵琶湖文化館）

大徳寺塔頭・大仙院方丈室中の山水図襖は、方丈創建の永正 10 年（1513 年）頃に制作されたと考えられ、唐物奉行として足利将軍家に仕えた相阿弥の筆と伝わる。本作は「唐物」に精通した相阿弥の代表作として位置づけられ、特にその画風や中国絵画との関連に焦点を当て様々に論じられてきた。他方、本作が建築に付随する障壁画である点はあまり考慮されず、本作が視覚的に示す意味や空間を飾る絵画として果たす機能については、なお検討すべき余地がある。そこでまず本発表では、本作の画面構成に注目し、その特徴が鑑賞者に与える視覚効果について考察する。そのうえで、大仙院方丈創建時の状況を踏まえつつ、本作の制作意図について新たな仮説を提示する。

まず、本作と近い時期に制作された障屏画を比較することによって、次の二点の特徴が明らかになる。第一に本紙上下に広い余白を設け「平遠」を強く意識する構図が採用されるという点、第二に全画面において画面最下部すなわち最前景に水景を配するという点である。これらの特徴を兼ね備える例は、現存する阿弥派作品や同時期に制作された大仙院方丈他室の障壁画をはじめ、室町から江戸初期にかけての大画面作品には認められない。したがって、これらの特徴は本作の制作に際して意図的に選択されたものとみることができる。

次に、室中と隣接する仏間との関係に注目する。禅院方丈建築において、室中と仏間は機能的に密接に結び付く。加えて、仏間に安置される開山像あるいは各室に描かれる障壁画同士もが意味的・視覚的に連関することが先行研究で指摘される。本作については、仏間に隣接する北面中央部にて風景のつながりが絶たれる点やモチーフが仏間に向かう動きを見せる点が注目されるが、これらの表現は仏間を室中空間の中心として視覚的に位置づけていると言える。上述した本作の特徴と室中・仏間の連関を踏まえると、本作の画面構成は室中に仏間を根源とする広大な「湖景」を見せる効果を生み出すことを意図したと推察できる。

最後に大仙院創建時の状況を確認しつつ、湖景が意味する内容について考察する。南宗禅の流れを汲む日本の臨済宗では、師資相承をたびたび水の流れに喩え、その根源を「曹源一滴水」すなわち六祖慧能の一滴と表現する。本作の注文主である大仙院開祖・古嶽宗亘が自ら定めた「大仙院法度」により、仏間に古嶽自身やその師の像が安置されたと考えられることから、室中には仏間に在る古嶽ら先師の像を水源として広がる湖景が表されたと言える。大仙院創建当時、古嶽は法脈の正統性を巡る対立の渦中にあり、自身と自身に連なる門派「北派」の正統性を示すべき立場にあった。このような状況を考慮し、本作が室中に参じる北派の僧に対し、先師から受け継がれた正法の広まり、すなわち北派の繁栄を視覚的に示すことを意図した可能性を提示する。